

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

沖縄語久米島謝名堂方言のテンス・アスペクト・エヴィデンシャルティー形式

van der Lubbe, Gijs / ファン・デル・ルベ, ハイス

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

42

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

23

(発行年 / Year)

2018-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021725>

沖縄語久米島謝名堂方言の テンス・アスペクト・エヴィデンシャリティー形式

ハイス・ファン・デル・ルベ¹

はじめに

本稿では、沖縄語久米島謝名堂方言の運動動詞のテンス・アスペクト・エヴィデンシャリティーをあらわす形式を考察する。

1. 対象言語

久米島謝名堂方言は、北琉球諸語に属する沖縄語の下位方言である。話者の内省によると、沖縄語を代表する首里方言との相違理解度が高いとのことであるが、テンス・アスペクト・エヴィデンシャリティー形式をはじめ謝名堂方言と首里方言には、さまざまな相違点がある。

謝名堂は、旧仲里村に属する集落である。沖縄でよく用いられる、いわゆる二村併称では、隣の泊集落とひっくるめてtumai-jararo:「泊・謝名堂」と言われ、1つの単位としてあつかわれる。泊と謝名堂の間には、言語差がなく、1つのことばになっているが、西に隣接する比嘉^{ひが}（沖縄語名dza:mu）のことばと東に隣接する宇根^{うね}（沖縄語名utjamu）のことばは、泊・謝名堂方言と少々ことなると言われている。本発表では、当該方言のことを謝名堂方言と呼ぶことにする。

2. 調査方法

2015年12月から2017年7月まで謝名堂方言の母語話者であるKM氏（女1936年生）とMI氏（男1947年生）を資料提供者とし、テンス・アスペクト・エヴィデンシャリティーのみならずさまざまなテーマに関する聞き取り調査をおこなってきた。それに加え、2011年9月と2015年12月に約3時間の自然談話をとった。その自然談話の資料もできるかぎり、考慮に入れ、不明な点を上に述べた2人の話者に確認した。自然談話の話者は、上に述べた2人以外、YS氏（女1932年生）、YS氏（女1942年生）、TY氏（女1929年生）、KY氏（女1922年生-†2013）である。なお、調査は終了しておらず本稿は中間報告的なものである。

3. 運動動詞のテンス・アスペクト・エヴィデンシャリティー

琉球諸語のなかのすべての変種が危機に瀕しているという状況のなかで、琉球諸語の文

¹ Gijs van der Lubbe

法記述のための調査をおこなうことが難しくなってきた。テンス・アスペクト・エヴィデンシャリティーの調査をおこなうにあたっては、自分の母語を離れた視点から見て、相対化して考えることができる母語話者の協力が必要である。そのため、このような調査をおこなうのがさらに難しくなっている。

3.1. 用語の概説

用語の定義は基本的に工藤（2014）にしたがうが、沖縄語久米島謝名堂方言に重要でないところを除く。

テンス

基本的に発話時を基本として、事象を発話時以前に位置づけるか否かを示すカテゴリーである。テンスは、日琉語族には形態論的カテゴリーとしてのテンスがあり、過去・非過去にわかれている。テンスは、アスペクトよりも抽象的な主体的時間であり、アスペクトからテンスへの文法化の進展が見られる。過去と未来とは、一見、発話時以前か以後かで対称的であるかのように見えるが、過去の出来事は体験的認識が可能であり、未来の出来事は、体験的認識が不可能である。したがって、対称的とはいえ、テンスは、認識的モード、エヴィデンシャリティーと相関する。

未来：発話時を基準にして運動が発話時以後におこなわれることが予想されるが実現していないことをあらわす。

現在：発話時に運動がおこなわれていることをあらわす。

過去：発話時を基準にして発話時前後に運動がおこなわれたことをあらわす。

アスペクト

アスペクトは、時間的展開性のある（終了あるいは開始の時間限界がある）動的事象をあらわす運動動詞述語に成立するカテゴリーである。perspective aspect、view-point aspectとも言われるように、文法的アスペクトは、他の事象との時間関係のなかで運動の時間的展開の捉え方のちがいである。アスペクトは、時間的限定性と相関しており、一時的（具体的）事象の場合に、完成、進行、結果といったアスペクトの意味の対立が成立する。一方、「彼はいつも6時におきる／おきている」といった時間的限定性のない（ポテンシャルな）反復の場合は、アスペクト対立がなくなり、「する」形式でも「している」形式でも可能になる。

完成：時間的に限界づけられた運動の捉え方であり、開始から終了までをひとまとまり

的に捉える場合もあれば、終了限界達成あるいは開始限界達成が焦点化される場合もある。他の事象との時間関係は継起となる。

日本語諸方言では無標形式であるが、北琉球語群には、「スル」相当形式がなく、シ中止形（“連用形”）+有情物存在動詞という有標形式が、テンスと相関して完成（未来）というアスペクト的意味をあらわすようになっている。

継続：運動の限界づけられない継続的な捉え方であり、他の事象との時間的關係は同時になる。日本語標準語の「している」形式は、動詞の語彙的意味のタイプと相関しつつ、主体の動作継続（進行）をあらわす場合と主体の変化結果の継続をあらわす場合がある。

進行：運動が、自らの時間的限界に至っていない過程的な姿・とらえ方である。〈継続〉は、動作のつづく状態か変化の結果がつづく状態をあらわすのに対し、〈進行〉は動作がダイナミックにすすむことをあらわすか、変化が変化達成へ向かって進むことをあらわす。

結果：変化が達成し、その結果が継続する状態をあらわす。主体結果と客体結果がある。日本語標準語の「している」形式では「戸が開いている」のような主体結果しかあらわせないが、九州・四国・中国地方を含める西日本諸方言のシトル系形式は、「戸が開いとる」「戸をあけとる」のように主体結果、客体結果の両方をあらわすこともできる。

直前：兆候の知覚に基づく近未来の動作・変化の推定をあらわす。西日本諸方言の多くの変種の例で説明すれば、戸があきつつあるのを見て「戸があきよる」という場合には知覚したままを捉えているのだが、風で戸ががたがた音をたてている状況で「戸があきよる」という場合には、〈直前〉というアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー的な意味がある。

習慣：運動の限界づけられない定期的な捉え方である。運動がおこなわれる回数が決まっていない。

反復：習慣と反復は似ているが、後者が同じ運動がおこなわれることを数回観察したということにしか基づかない。

パーフェクト：パーフェクトという用語は、運動動詞にある複合的な時間的意味でもあるが、〈先行時の運動の完成〉と〈以後の設定時における結果、痕跡、効力の継続〉の両方をとらえる複合的な時間的意味である（工藤：2014）。

エヴィデンシャリティー

エヴィデンシャリティーは、ある発言の情報源がどのようなものかということによって形式を変える文法的カテゴリーである。「証拠性」ともいう。

直接確認：話し手が直接確認した動作・変化であることを形式に明示することである。

間接確認：話し手が間接的証拠で確認した以前の動作・変化を形式に明示することである。

4. 沖縄語久米島謝名堂方言のテンス・アスペクト・エヴィデンシャルティー形式

次の表は、沖縄語久米島謝名堂方言の主体動作動詞numiN「飲む」とutuφuN「落とす」のテンス・アスペクト・エヴィデンシャルティーによる述語形式を示す。以下の表に日本語相当形式も入れることにする。この日本語相当形式は沖縄語久米島謝名堂方言の訳ではなく、久米島謝名堂方言が分からない読者にとって理解しやすくするためである。括弧内の形式が用いられていることは、確認できていない。本稿では、ボールド体になっている形式のみを参考し、その他の形式の分析は、今後の課題にしたい。

表1 謝名方言動詞の中核的アスペクト・テンス・エヴィデンシャルティー形式。

動詞suN「する」	日本語相当形式	主体動作動詞 (飲む)	主体動作客体変化 動詞 (落とす)	主体変化動詞 (死ぬ)
1) suN	シオリ	numiN	utuφuN	finiN
2) tfaN	シタ	nuraN	ututfaN	fidzaN
3) tfoN	シテオリ	nuroN	ututfoN	fidzoN
4) tfo:taN	シテオッタ	nuro:taN	ututfo:taN	fidzo:taN
5) tfe:tsuN	シテアルキオリ	nure:tsuN	ututfe:tsuN	fidze:tsuN
6) tfe:tsutaN	シテアルキオッタ	nure:tsutaN	ututfe:tsutaN	fidze:tsutaN
7) sutaN	シオッタ	numitaN	utuφutaN	finitaN
8) tfeN	シテアリ	nureN	ututfeN	fidzeN
9) tfe:taN	シテアッタ	nure:taN	ututfe:taN	(fidze:taN)
10) tfo:teN	シテオツテアリ	nuro:teN	ututfo:teN	fidzo:teN
11) suteN	シオツテアッタ	numiteN	utuφuteN	finiteN
12) tfe:teN	シテアツテアル	nure:teN	ututfe:teN	fidze:teN
13) tfe:tsuteN	シテアルキオツテアリ	nure:tsuteN	ututfe:tsuteN	fidze:tsuteN

次の表は、動詞の各分類におけるアスペクト・テンス・エヴィデンシャルティー形式の意味用法をしめしている。

表2 動詞の分類とアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー形式の意味用法。

動詞suN 「する」	日本語相当形式	主体動作動詞に おける意味用法	主体動作客体変化動 詞における意味用法	主体変化動詞に おける意味用法
suN	シオリ	〈完成・未来〉 〈直前・未来〉 〈反復習慣・現在〉 〈特性〉	〈完成・未来〉 〈直前・未来〉 〈反復習慣・現在〉 〈特性〉	〈完成・未来〉 〈直前・未来〉 〈反復習慣・現在〉 〈特性〉
tjaN	シタ	〈完成・過去〉 〈パーフェクト・現在〉	〈完成・過去〉 〈パーフェクト・現在〉	〈完成・過去〉 〈パーフェクト・現在〉
tfoN	シテオリ	〈反復習慣・現在〉 〈パーフェクト・現在〉	〈反復習慣・現在〉 〈結果継続・現在〉 〈パーフェクト・現在〉	〈反復習慣・現在〉 〈結果継続・現在〉 〈パーフェクト・現在〉
tje:tsuN	シテアルキオリ	〈動作継続・現在〉 〈反復習慣・現在〉	〈動作継続・現在〉 〈反復習慣・現在〉	〈反復習慣・現在〉
sutaN	シオッタ	〈直接確認・過去〉 〈反復習慣・過去〉 〈未遂〉	〈直接確認・過去〉 〈反復習慣・過去〉 〈未遂〉	〈直接確認・過去〉 〈反復習慣・過去〉 〈未遂〉
tjeN	シテアリ	〈パーフェクト・現在〉 〈間接確認・過去〉 〈意外性〉	〈パーフェクト・現在〉 〈結果継続・現在〉 〈間接確認・過去〉 〈意外性〉	〈間接確認・過去〉 〈意外性〉

次の表では、使用頻度が低い、周辺のテンス・アスペクト・エヴィデンシャリティー形式とアスペクトに関わる形式がしめされている。

表3 周辺のテンス・アスペクト・エヴィデンシャリティー形式とアスペクトに関わる形式。

沖縄語久米島謝名堂方言形式	日本語訳
se:gijuN	しつつある
fj:gisaN/fj:gisa:	しそう
fj:gata:	しそう
tji neN/ne:raN	してしまう
suN=tjitji suN	しようとする
saN=tjitji suN	しようとする

前ページでしめしているように、本稿では、叙述法の語尾-Nでおわる形式を代表する形式としてあげることになっている。この-Nがつく語幹を尾略形と呼ぶことにする。-Nのほか尾略形につく形態素がある。国立国語研究所（平成13年：67）の主張によると、標準語の文語の助動詞の「む」「らむ」「けむ」と助詞の「なむ」と関係あるであろうとのことである。沖縄語首里方言などことなり、沖縄語久米島謝名堂方言では、音素配列論上、長母音+Nと二重母音+Nからなる超重音節を避ける傾向がある²。そのため、音素/N/の前に長母音がおこりえず、尾略形が長母音でおわる場合、-Nがつくとその長母音が短母音化する。-Nと同じ形態論的な位置にあらわれる形態素がつく場合は、長母音がそのままあらわれる。

表4 尾略形の長母音の音素配列論的ふるまい。

	尾略形	強調-ru	叙述法-N
使う	tʃike:-	tʃike:ru	tʃikeN
知っている	fittʃo:-	fittʃo:ru	fittʃoN
買ってある	ko:te:-	ko:te:ru	ko:teN

4.1. suN形（シオリ相当）

suN形は、シオリ相当形式である。久米島謝名堂方言を含める沖縄語において運動動詞には、共時的にスル相当形式がなく、非過去がsuN形によってあらわされている。

奄美群島の諸言語と沖縄島とその離島の諸言語に日本語のスル相当形式が述語形式として衰退したが、シオリ相当形式は、存在する。通時的には、この形式がいわゆる連用形に存在動詞uN「いる」がついて融合した形である。この形式の文法化が進んでおり、連用形とuNという2つの要素を分けることができず、完全に1つの語形になっている。

①主体動作動詞

suN形は、主体動作動詞において〈完成・未来〉、〈直前・未来〉、〈反復習慣・現在〉、〈特性〉をあらわす。

² 沖縄語久米島謝名堂方言の音素配列体系は、同じ北琉球諸語に属する沖永良部語正名方言（ファン・デル・ルベ2016年：48）とことなり、超重音節を絶対的に許さない体系ではない。沖縄語久米島謝名堂方言においては、ko:ibusaN「買いたい」のような長母音と/i/の連続からなる超重音節が許されているのに対し、沖永良部語正名方言においては、長母音と/i/の連続からなる超重音節も許されていない。

完成・未来

- 1) atʃa=kara uri <dorama> NdzuN
明日から そのドラマを 見る
- 2) itta=ga uruine: waN=ro: urujuN
あなたたちが 踊ったら 私も 踊る

直前・未来

- 3) ami ɸujuN=ro: ha:ku na:ka=katʃi iribal
雨 降るよ！ 速く 中に 入れ！
- 4) aNma=ga kwa:ʃi tʃijuN=ro:. kamibusa:raba nama kuine: naraN=ro:
お母さんが お菓子 切るよ。 食べたいなら 今 来なければならぬよ。

反復習慣・現在

- 5) uttu=ga ju: <kare:> kamiN
弟が 良く カレーを 食べる。
- 6) aNma=ja tʃikaguru me:nitʃi kwa:ʃi tsukujuN
お母さんは 最近 毎日 お菓子を 作る
- 7) taro:, me:nitʃi watta: ja:=katʃi tsuN
太郎、毎日 私たちの家に 来る
- 8) tʃikaguru ju: haNta=kara iʃi=ga utijuN
最近 よく 崖から 石が 落ちる

特性

- 9) are: uho:sa numiN
彼は たくさん 飲む

②主体動作客体変化動詞

suN形は、主体動作客体変化動詞において〈完成・未来〉、〈直前・未来〉、〈反復習慣・現在〉、〈特性〉をあらわす。

直前・未来

10) [赤ん坊が口に入れてはいかないものを口に入れようとしているのを見て]

ai! kutʃi=katʃi irijuN=ro!
おい！ 口に 入れるよ！

完成・未来

11) -taro:=nu Nmaribi:=ni ta:=ga kwa:ʃi tsukujuga?

太郎の 誕生日に 誰が お菓子を 作るか？

-hanako=ga=ru tsukujuN=ro:. wano: tsukuiju:saN-gutu

花子が 作るよ。 私は 作ることができないから。

反復習慣・現在

12) aNma:=ga me:nitʃi haNme: tsukujuN

お母さんが 毎日 ご飯を 作る。

特性

13) ʃima=jo:te: inagu=ga haNme: tsukujuN

島では、 女の人^が ご飯を 作る。

③主体変化動詞

suN形は、主体変化動詞において〈完成・未来〉、〈直前・未来〉、〈反復習慣・現在〉、〈特性〉をあらわす。

直前・未来

14) Ntʃi Nri! <deNki>=ga ke:juN=ro!

見てみて！ 電気が 消えるよ！

完成・未来

15) atʃa mi:ga itsuN

明日 見に 行く

反復習慣・現在

16) saki numi:ne: tʃira akamiN=ro:

酒 飲んだら 顔 赤くなるよ

17) <daigaku> <sotsugyo:>-fi:ne: kumidzima=katfi ke:juN
大学を 卒業したら 久米島に 帰る

特性

18) niNzino: finiN
人間は 死ぬ。

4.2. tʃaN形 (シタ相当)

チャン形は、シタ相当形式である。

①主体動作動詞

tʃaN形は、主体動作動詞において〈完成・過去〉、〈パーフェクト・現在〉をあらわす。

完成・過去

19) kinu: ami ɸutaN
昨日 雨 降った。

パーフェクト・現在

20) -<suta:wo:dzu>=tʃo:nu <je:ga> Ntʃi=na?
スターウォーズという 映画 見たか?
-iN, NtʃaN
うん、見た。

21) -saki nu:ri=na?
酒を 飲んだか?
-iN, nuraN=ro:
うん、飲んだよ。

②主体動作客体変化動詞

tʃaN形は、主体動作客体変化動詞において〈完成・過去〉、〈パーフェクト・現在〉をあらわす。

完成・過去

22) kune:ra atʃisa:ta-kutu, ja: akitaN
此間 暑かったから、家を 開けた。

23) kinu: <rokudʒi>=ni akitaN
昨日 6時に 開けた

パーフェクト・現在

24) -na: <ke:ki> tʃitʃi=na?
もう ケーキを 切ったか?
-na: tʃitʃaN=ro:
もう 切ったよ。

25) -kwa:ʃi tsukuti=na?
お菓子 作ったか?
-iN, tsukutaN=ro:
うん、作ったよ

③主体変化動詞

tʃaN形は、主体変化動詞において〈完成・過去〉、〈パーフェクト・現在〉をあらわす。

完成・過去

26) wano: kune:ra taro:-ta:=katʃi aʃibi:ga NdzaN
私は 此間 太郎たちのうちに 遊びに 行った。

パーフェクト・現在

27) -mata kwe:ti=na?
また 太ったか?
-iN, mata kwe:taN=ro:
うん、また 太ったよ。

4.3. tʃoN形 (シテオリ相当)

tʃoN形は、シテオリ相当形式である。日本語のシテに相当する、動詞suN「する」の中止形tʃiに存在動詞uN「いる」がつき、融合した形式である。

この形式は、上に述べたシオリ相当形式であるsuN形とことなり、とりたて助詞を介在させた時、テ相当中止形と存在動詞として分析的に表現される。次の用例では、itsuN「行く」のシテオリ相当形式のNd₃₀N「行っている」が焦点化助詞ruによる焦点化を受けており、叙述法の語尾-Nの形態論的な位置に強調をあらわす語尾-ruがあらわれている。融合形ではなく、分析的な形式であるが、融合形のNd₃₀Nとまったく同じ意味合いである。

28) Nd_{3i}=ru u:ru
行って いるのだよ。

①主体動作動詞

tjoN形は、主体動作動詞において〈反復習慣・現在〉と〈パーフェクト・現在〉をあらわす。

反復習慣・現在

29) uri <dorama> NtjoN
その ドラマを 見ている。

30) me:nitji <terebi> NtjoN
毎日 テレビを 見ている。

31) me:nitji saki nuroN
毎日 酒を 飲んでいる。

パーフェクト・現在

32) wano: tsuke: ari=tu juNtaku tjoN
私は 一回 彼と しゃべっている。

33) kudzu-mitsunati ari=tu tsuke: itfatoN
一昨年 彼と 一回 あって

②主体動作客体変化動詞

tjoN形は、主体動作客体変化動詞において〈反復習慣・現在〉、〈結果継続・現在〉、〈パーフェクト・現在〉をあらわす。

反復習慣・現在

- 34) aNma:=ja tʃikaguru me:nitʃi kwa:ʃi tsukutoN
お母さんは 最近 毎日 お菓子を 作っている。

結果継続・現在

- 35) wano: ki: mi:ha:nu <kutsu> kuroN
私は 今日 新しい 靴を はいている。

パーフェクト・現在

- 36) uri Nmo: waN=ga na: aratoN
その 芋は 私が もう 洗っている。

③主体変化動詞

tʃoN形は、主体変化動詞において〈反復習慣・現在〉、〈結果継続・現在〉、〈パーフェクト・現在〉をあらわす。

反復習慣・現在

- 37) me:nitʃi ja:=katʃi tʃoN
毎日 家に 来ている。

- 38) me:nitʃi tsu=ga mari:tʃoN
毎日 人が 亡くなっている。

結果継続・現在

- 39) <deNke:> kisa=mari tʃitʃo:tahiga, ke:toN
電気は 先まで ついていたけど、消えている。

- 40) taro:=ga <je:ga> mi:ga NdʒoN
太郎が 映画を 見に行っている。

- 41) kinu:=nu uʃuami=tʃi haNta=nu wi:=kara iʃi=ga utitoN
昨日の 大雨で 崖の 上から 石が 落ちている。

パーフェクト・現在

- 42) <amerika>=katfe: take: NdzoN
アメリカには 二回 行っている。

4.4. tfe:tsuN形 (シテアルキオリ相当形式)

tfe:tsuN形は、シテアルキオリ相当形式である。-ti中止形に動詞attsuN「歩く」がつき、融合した形である。北琉球諸語におけるアルキオリの文法化の詳細に関しては、ファン・デル・ルベ (2014) に参考されたい。

tjoN形とことなり、動詞部分が焦点化される場合、元の分析的な形式にならず、連用形にとりたて助詞がつき、軽動詞suN「する」がtfe:tsuN形をとる。次の用例では、助詞jaによってとりたてられている動作継続をあらわす述語の用例である³。

- 43) 踊ってはいるけど、 上手ではない。
A. ○ uruje: tfe:tsuhiga, dzo:dze: araN
urui=ja
B. × urute: attsuhiga, dzo:dze: araN
uruti=ja

①主体動作動詞

tfe:tsuN形は、主体動作動詞において〈動作継続 (進行)・現在〉と〈反復習慣・現在〉をあらわす。

動作継続 (進行)・現在

- 44) wano: nama <terebi> Ntfe:tsuN
私は 今 テレビを 見ている。

45) uttu=ga <bi:ru> nure:tsuN
弟が ビールを 飲んでいる。

³ 国頭村奥の方言では、謝名堂方言と同様、シテアルキオリ相当形式が動作継続 (進行) をあらわすが、焦点化される場合、とりたて助詞がテ相当中止形につき、akkuN「歩く」が助動詞としてあらわれ、元の分析的な形式が見えてくる。次の用例では、奥方言と謝名堂方言の違いがよく見える。

「踊っているかどうか分からない」

奥: udu:ti=ga akkura waharaN

謝名堂: urui=ga tfe:tsura wakaraN

反復習慣・現在

46) uttu=ga me:nitji <terebi> Ntfe:tsuN
弟が 毎日 テレビを 見ている。

47) uttu=ga me:nitji saki nure:tsuN
弟が 毎日 酒を 飲んでいる。

②主体動作客体変化動詞

tfe:tsuN形は、主体動作客体変化動詞において〈動作継続（進行）・現在〉と〈反復習慣・現在〉をあらわす。

動作継続（進行）・現在

48) aNma:=ga toNgwa=jo:ti kwa:ji tsukute:tsuN
お母さんが 台所で お菓子を 作っている。

49) taro:=ga jiNre: <mado> akite:tsuN
太郎が 少しずつ 窓を 開けている。

反復習慣・現在

50) aNma:=ga me:nitji ju:baN=ni tfikimuN tfitfe:tsuN
お母さんが 毎日 夕飯に 漬物を 切っている。

51) aNma:=ja tfikaguru me:nitji kwa:ji tsukute:tsuN
お母さんは 最近 毎日 お菓子を 作っている。

52) aNma:=ga me:nitji <rokudzi>=ni <mado> akite:tsuN
お母さんが 毎日 6時に 窓を 開けている。

③主体変化動詞

tfe:tsuN形は、主体変化動詞において〈反復習慣・現在〉のみをあらわし、〈動作継続・現在〉をあらわさない。

反復習慣・現在

53) taro:=ga me:nitʃi watta: ja:=katʃi tʃe:tsuN
太郎が 毎日 うちの家に 来ている。

54) are: ju: <je:ga> mi:ga Ndze:tsuN
彼は よく 映画を 見に 行っている。

55) haNta=kara hittʃi: ifi=ga utite:tsuN
崖から しょっちゅう 石が 落ちている。

56) tʃikaguru ju: haNta=kara ifi=ga utite:tsuN
最近 よく 崖から 石が 落ちている。

57) me:nitʃi tsu=ga jaNme:=tʃi mai-tʃe:tsuN
毎日 人が 病気で 亡くなっている。

4.5. sutaN形 (シオッタ相当形式)

sutaN形は、シオッタ相当形式である。この形式の由来は、いわゆる連用形に有情物存在動詞uN「いる」の過去形がついた形にある。

sutaN形には、3つの意味用法がある。〈直接確認・過去〉、〈反復習慣・過去〉、〈未遂〉。〈直接確認・過去〉には、人称制限があり、1人称に使うことができない。

①主体動作動詞

sutaN形は、主体動作動詞において〈直接確認・過去〉、〈反復習慣・過去〉、〈未遂〉をあらわす。

直接確認・過去

58) aNma:! taro:=ga waN=ga chi:ge:te:tsuhi NdzutaN=ro!
お母さん！ 太郎が 私が 着替えているのを 見たよ！

反復習慣・過去

59) wano: sake: numaN nato:higa, Nkase: numitaN
私は 酒は 飲まなくなっているけど、昔は 飲んでいた。

未遂

60) ne:hiN jassaine: waN=ro: saki numitaN
もっと 安かったら 私も 酒を 飲んだ。

②主体動作客体変化動詞

sutaN形は、主体動作客体変化動詞において〈直接確認・過去〉、〈反復習慣・過去〉、〈未遂〉をあらわす。

直接確認・過去

61) e:! φusume:=ga <saiφu> utuφutaN=ro:
おい！ お爺さんが 財布を 落としたよ。

反復習慣・過去

62) aNma:=ga me:dzitji misu tsukujutaN
お母さんが 毎月 味噌を 作っていた。

未遂

63) ne:hiN atfisaine: <mado> akijutaN
もっと 暑かったら 窓を 開けた。

③主体変化動詞

sutaN形は、主体変化動詞において〈直接確認・過去〉、〈反復習慣・過去〉、〈未遂〉をあらわす。

直接確認・過去

64) taro:=ga maNgara=katji itsutaN
太郎が どこかに 行った。

反復習慣・過去

65) anu dzibuN taro:=ja me:nitji tsu:taN
あの頃 太郎は 毎日 来ていた。

66) anu tutfe: ju: <deNki>=ga ke:jutaN
あの時は よく 電気が 消えていた。

未遂

67) ami φuraine: taro:=ro: tsu:taN
雨 降らなければ、太郎も 来ていた。

68) <deNki>=ga jagati ke:jutan
電気が もう少しで 消えた。

4.6. tjeN形 (シテアリ相当)

tjeN形は、シテアリ相当形式である。-ti中止形に無情物存在動詞aN「ある」がつき、融合した形式である。

tjeN形には、さまざまな意味用法があり、その意味用法により、形態論的な特徴がことになってくる。そのため、通時的に-ti中止形+無情物存在動詞に由来するのは同じであるのに対し、共時的には、少なくとも2つのtjeN形が存在すると見なしてもよいと思われる。

2つのtjeN形の違いは、とりたてる助詞が介在させる時に見えてくる。次の形式を考察されたい。

表5 とりたて助詞が介在している形式のパターン。カタカナの日本語訳は、疑似日本語である。

	基底形式	とりたて助詞jaが介在している形式
シオリ相当	tsukujuN 作る	tsukuje: suN (tsukui=ja) 作りは する
シテオリ相当	tsukutoN 作っている	tsukute: uN (tsukuti=ja) 作っては いる
シタ相当	tsukutaN 作った	tsukuje: tjaN (tsukui=ja) 作りは した
シテアリ相当 (結果)	tsukuteN 作ってアル	tsukute: aN (tsukuti=ja) 作っては ある
シテアリ相当 (間接確認／意外性)	tsukuteN 作ってアル	tsukuje: tjeN (tsukui=ja) 作りは してアル

前ページでしめしているように、とりたて助詞ja「は」が述語形式に介在するパターンが2つある。①jaが動詞のいわゆる連用形につき、軽動詞suN「する」がテンス・アスペクト・エヴィデンシャルティー形式をとる。②jaが-ti中止形につき、存在動詞が助動詞としてあらわれ、元の分析的な形式になる。シオリ相当形式とシタ相当形式は、パターン①によってとりたて助詞を受けるのに対し、シテオリ相当形式は、パターン②によってとりたて助詞を受ける。しかし、シテアリ相当形式の場合は、その機能によってことになってくる。結果をあらわす場合は、パターン②であるが、間接確認か意外性をあらわす場合は、パターン①である。話者の内省によると、パターンを置き換えると、意味がことになってくる。

次の用例では、客体結果をあらわすtjeN形の述語がとりたて助詞ja「は」を受け、パターン②によって分析的な形式としてあらわれている。

69) tsukute: aN. je:-higa, ma:ko: neN
 tsukuti=ja
 作っては アル。 だけど、 おいしくはない。

上の用例をパターン①に変えることはできない。次の用例は、客体結果と意味で使うことができず、非文である。

70) × tsukuje: tjeN. je:-higa, ma:ko: neN
 tsukui=ja
 作りは してアル。 だけど、 おいしくはない。

用例(69)を、とりたて助詞jaを使わずに言い換えると、客体結果の意味は、変わらず、次のようになる。

71) tsukute:-higa, ma:ko: neN
 作ってアルけど、 おいしくはない。

次の用例では、tjeN形が間接確認をあらわしており、Aは、ケーキを見かけないため、お母さんがケーキを作っていないと思っているが、Bは、台所においてある道具とケーキのくずを見た上での会話である。とりたて助詞jaがパターン①によってあらわれている。

72) A : <ke:ke> ne:raN=ja:. aNma:, nama tsukute: neN hadzi=ja:
ケーキはないね。 お母さん まだ 作ってないはずだね。

B : Ntʃi Nri! tsukuje: tʃeN=tiba:
tsukui=ja
見てみて！ 作りは したんだよ。

tʃeN形のアスペクト的な意味用法は、〈パーフェクト・現在〉と〈結果継続・現在〉で2つあり、ムード的な意味用法は、〈間接確認・過去〉と〈意外性〉で2つがある。

①主体動作動詞

tʃeN形は、主体動作動詞において〈パーフェクト・現在〉というアスペクト的な意味をあらわし、ムード的な意味用法は、〈間接確認・過去〉と〈意外性〉をあらわす。

パーフェクト・現在

73) ju:baN kamaN tukui <bi:ru> nureN
夕飯を 食べないうちに ビールを 飲んでいる。

74) uri sumutʃe: haNbuN jureN
その 本は はんぶん 読んでいる。

間接確認・過去

75) [弟の顔が赤くなっているのを見て]

uttu=ga <bi:ru> nureN=ja:
弟が ビールを 飲んだんだね。

76) [ビールがないことに気づいて]

e:! <bi:ru> muru nureN=tiba:
おい！ ビールを 全部 飲んだんだよ。

意外性

77) haNma:jo! kwa:ʃi mutu kare:haja:
あらまー！ お菓子を 全部 食べたんだね。

②主体動作客体変化動詞

tjeN形は、主体動作客体変化動詞において〈パーフェクト・現在〉と〈結果継続・現在〉というアスペク的な意味をあらわし、ムード的な意味用法は、〈間接確認・過去〉と〈意外性〉をあらわす。

パーフェクト・現在

- 78) -<mainaNba:>=nu <foruje:> <fibaraku> ukura:he: mafi=ro:
マイナンバーの書類は しばらく 送らないほうが いいよ。
-na: ukuteN=jo:
もう 送っているよ。

結果継続・現在

- 79) taro:=ga <mado> akiteN
太郎が 窓を 開けた。

間接確認・過去

- 80) [ナイフに血がついているのを見て]
aNma:=ja kinu: bi:bi tfitje:haja:
お母さんは 昨日 指を 切ったんだね。

81) [台所においてある道具とお菓子のくずを見て]

- aNma:=ga toNgwa=jo:ti kwa:fi tsukute:haja:
お母さんが 台所で お菓子を 作ったんだね。

意外性

- 82) mata <kare:> tsukute:haja:
また カレーを 作ったんだね。

③主体変化動詞

tjeN形は、主体変化動詞において〈間接確認・過去〉と〈意外性〉をあらわす。〈パーフェクト・現在〉という意味用法は、確認できなかった。

間接確認・過去

83) [玄関に太郎の靴が置いてあるの見て]

taro:=ga tʃe:haja:

太郎が 来たんだね。

84) [映画館のチケットがテーブルの上にあるのを見て]

kinu: taro:=ga mi:ga Ndze:haja:

昨日 太郎が 見に行っただね。

意外性

85) uNdzu=ro: meNso:tʃe:haja!

あなた様も いらっしゃったんですね！

5. まとめ：沖縄語諸方言の中の久米島謝名堂方言のテンス・アスペクト・ムード体系の特徴と今度の課題。

沖縄語に属する言語のテンス・アスペクト・エヴィデンシャリティー体系の記述としては、首里（工藤など：2007）、うるま市安慶名（かりまた：2004）、今帰仁村謝名（島袋、島袋&狩俣など）、津堅（又吉：2014）などがある。これらのテンス・アスペクト・エヴィデンシャリティー体系と大きくことなる点は、久米島謝名堂方言における主体動作動詞と主体動作客体変化動詞の動作継続（進行）がシテアルキオリ相当形式のみにあらわされており、シテオリ相当形式は、動作継続をあらわすのに用いられないことである。久米島謝名堂方言は、進行専用形式が存在するため、3項対立型のアスペクトになっている。

動詞「歩く」（アルキオリ）が文法化し、アスペクト的な意味をあらわすようになったのは、沖縄語諸方言と南奄美群島諸語に決して珍しい現象ではないが、次の4つの点が言語によってことなる。①融合した形で用いられているかどうか、②反復習慣のみをあらわすか、それとも反復習慣と動作継続を両方あらわすか、③同じアスペクトを他の形式でもあらわしうるかどうか、④中核的形式であるかどうか。

表6 沖縄語諸方言における中止形⁴+アルキオリ形式⁵。

融合した形式は、ボールド体である。

×「用いられない」

○「そのみ用いられる」

○+「他の形式も用いられる」

△「他の形式が主の形式として用いられる」

	形式の特徴 中止形+アルキオリ形式	意味用法 反復習慣	動作継続
沖縄語諸方言			
久米島謝名堂	tʃe:tsuN	○+	○
糸満	sakkuN	○+	○+
西原	fʃi attʃuN	△	×
読谷楚辺	çitʃe:kuN	△	×
津堅	hakuN	○+	×
伊平屋田名	he: attsuN	○+	○+
今帰仁謝名	çitʃattʃuN	△	×
伊江島	fʃitʃi aitʃuN	○+	○+
国頭奥	sa:kuN	○+	○
南奄美群島諸語			
鳥島	se:tsuN	○+	○
与論麦屋	fʃitʃa:itʃuN	?	△
沖永良部正名	fʃi: akkimu	△	×

表6でしめしているように、融合した形式であるかどうかは、動作継続としても用いられるかどうかと、中核的な形式であるかどうかと関係がないようである。

既出のように、本稿は、中間報告的なものであり、あつかった対象が部分的である。表1でしめされているボールド体でない形式の分析と状態動詞、存在動詞の分析とテンス・アスペクト・エヴィデンシャルティーの丁寧語を今後の課題にしたい。

⁴ 伊平屋田名方言においては、テ相当中止形が存在せず、動詞attsuN「歩く」がシアリ相当中止形につくため、ここでは、「シテアルキオリ相当形式」という用語を用いず、「中止形+アルキオリ相当形式」と呼ぶことにしている。

⁵ 津堅の資料は、又吉（2014）から。今帰仁謝名の資料は、島袋（1997）から。伊江島の資料は、橋尾（1993）から。与論の資料は、菊（2007）から。今帰仁謝名の資料は、糸満、西原、読谷楚辺、伊平屋田名、国頭奥の資料は、著者の調査で得た資料である。

参考文献

- かりまたしげひさ (2004) 「沖縄方言の動詞のアスペクト・テンス・モード—沖縄県具志川市安慶名方言のばあい—」 工藤真由美編『日本語のアスペクト・テンス・モード体系—標準語研究を超えて—』 ひつじ書房
- ファン・デル・ルベ・ハイス (2016) 「琉球沖永良部語正名方言の記述文法研究」 琉球大学大学院 博士論文
- ファン・デル・ルベ・ハイス (2014) 「沖永良部語正名方言における動詞「?akkimu」の文法化」『琉球の方言』 39号 pp.75-85 法政大学沖縄文化研究所
- 菊 秀史 (2007) 「与論の言葉で話そう ユンスフトゥバではなそう(2)—動詞をおぼえよう (文法・文型編)—」 与論民族村
- 橋尾直和 (1993) 「伊江島方言のテンス・アスペクト・に関する一考察」『人文学報』 243 pp.23-45、1993-03 首都大学東京都市教養学部人文・社会系、東京都立大学人文学部
- 工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美 (2007) 「首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンスシャリティー」『大阪大学大学院文学研究科紀要』 47
- 工藤真由美 (2014) 「現代日本語モード・テンス・アスペクト論」 ひつじ書房
- 国立国語研究所 (2001) 『沖縄語辞典』
- 島袋幸子・かりまたしげひさ (2009) 「沖縄県今帰仁村謝名方言アスペクト・テンス・モード」『日本東洋文化論集』 15 pp.243-295
- 島袋幸子 (1997) 「琉球列島の言語 (沖縄北部方言)」『日本列島の言語 言語学大辞典セレクション』 三省堂
- 又吉里美 (2014) 「津堅方言の動詞の記述—動詞の形態とテンス・アスペクト—」『琉球の方言』 39号 pp.117-140 法政大学沖縄文化研究所

付記

本研究にご協力くださった話者の皆様に心より感謝申し上げます。また、査読に際して多くの貴重なご意見を賜り、記してお礼申し上げます。